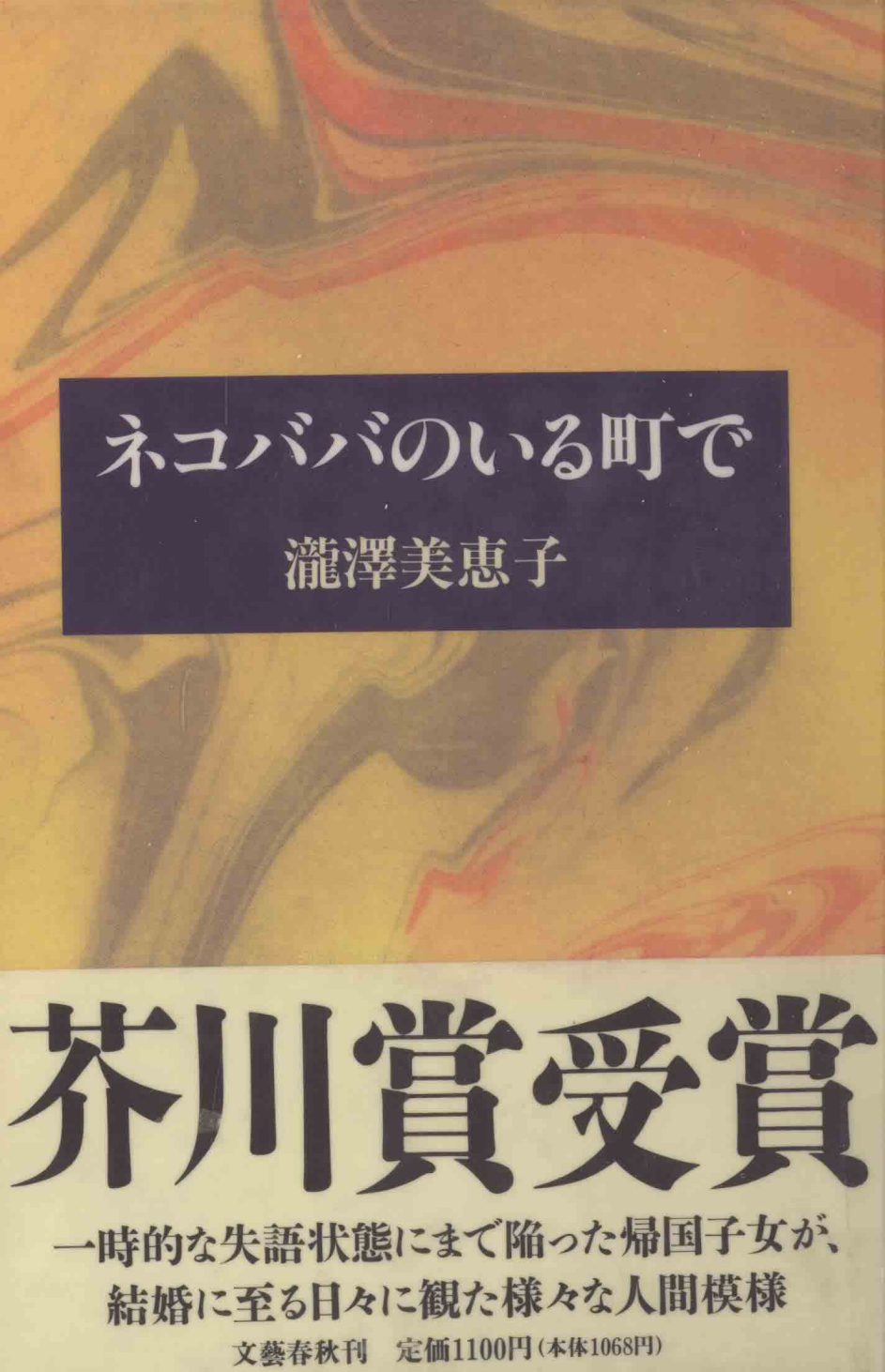




ネコババのいる町で

瀧澤美恵子

芥川賞受賞

一時的な失語状態にまで陥った帰国子女が、
結婚に至る日々に観た様々な人間模様

文藝春秋刊 定価1100円(本体1068円)

ネコババのいる町で

瀧澤美恵子

文藝春秋

ネコババのいる町で

平成二年三月十五日 第一刷発行
平成二年五月十日 第六刷発行
定価はカバーに表示してあります

著者略歴

昭和十四年新潟県生れ。東京外国語大学中国語科中退。昭和海运定航課、マーシュアンドマクナレン(株)社長秘書勤務。現在主婦。「ネコババのいる町で」、第六十九回「文藝界」新人賞、第百二回芥川賞を受賞。

著者 瀧澤美恵子

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三ノ二十二
郵便番号 一〇二
電話東京 〇三三—三三三三 (大代表)

印刷所 大日本印刷

製本所 大日製本

© MIEKO TAKIZAWA 1990

万一、落し、乱丁の場合はお取替いたします

ISBN4-16-311720-2

Printed in Japan

目次

ネコババのいる町で	5
神の落とし子	71
リリスの長い髪	175

裝釘
森玲子

ネコババのいる町で

初出
ネコババのいる町で（「文藝界」平成元年十一月号）
神の落とし子（「文藝界」平成二年三月号）
リスの長い髪（書下し）

ネコババのいる町で

今度はとうとう叔母が死んだ。わたしの身の死は、いつも思いがけないときに、突然訪れて、そのたびわたしは言葉を失い、隣のネコババを心配させるのだった。

その日、夜になってみんなが帰ったあと、わたしは病院の霊安室に一人残った。

「早く死にたいわ」

叔母の囁く声が、耳もとで聞こえたような気のしたわたしは、慌てて立ち上がり、顔の白布をとってみた。叔母の顔はほほ笑んでいた。確かめるように叔母の胸に手をあててみて、やつとわたしはほっとした。

生前の叔母は口癖のように、もう死にたいわ、といていた。あれは本音だったのか、と叔母の穏やかな顔に見入りながら、わたしは急に叔母がかわいそうになり、嗚咽を堪えようとしたり、咳込んでしまった。

ネコババから電話で、叔母が倒れた、と聞いたとき、咄嗟にわたしは自殺かと思ったほどだから、叔母が死にたいというのを、冗談に聞き流してはいたのだが、どこかでいつも氣にして暮らしていたのだと思う。

「みんな恵里子が来てからなのよ」

と感情にかられてわたしを罵った叔母の言葉を、わたしはなにかにつけては思い出していたから、死にたい原因がわたしにあるのではないか、と恐れていたのかもしれない。

わたしは時々呻くような泣き声を漏らしながら、遺体のそばに立ったり坐ったりして、その日叔母はどういう予定だったのだろう、と考えてみた。二年前に祖母が亡くなってから、叔母は日当たりの悪い家に一人で住んでいた。夫と息子とわたしの一家は、近所の賃貸マンションに住んでいて、会おうと思えばいつでも会える距離だったが、まだ四十五歳で、会社勤めをやめていなかった叔母は、気ままがいいといって、あまり訪ねたり、訪ねられたりしなくなっていた。

倒れた日も、叔母は会社へ行くつもりで、いつも通り朝食をとっていたらしい。食べている最中に突然背中に激痛のきた叔母は、救急車を呼ぶのが精一杯だったらしく、救急車が到着したとき、玄関は鍵がかかったままだったそうだ。「縁側のガラス戸をはずして入ったのよ」と後でネコババがいつていた。

保育園で働いているわたしは、知らせを受けて病院へかけつけたときには、もう叔母の意識はなかった。心臓の付近の血管が破裂したのだ、という説明があった。叔母は、午後四時には

息をひきとってしまったのだが、病院にかつぎこまれてから一日たつていないということ、検屍というのが必要だといわれ、その検屍官の来るのを待つて、とうとう翌日まで、遺体を病院に安置することになってしまった。検屍というのは、事故死とか他殺の可能性を調べるのが目的であるらしく、検査が始まれば五、六分ですんでしまったほどの簡単なものだったが、その日はなぜか検屍官の都合がつかなかったらしい。

身寄りのないわたしは、祖母に引き続く叔母の死で、本当に声もでないほど動転していた。夫も息子もいるのに、これで天涯孤独になった、とひたすら思い込んでしまつて、夫の顔を見ても、なんの感慨もわかなかつた。夫や息子どころか、わたしには生みの母も実の父もいるのだったが、身寄りというと、祖母と叔母、と思つて育つてきたのだ。

夫や夫の家族、ネコババや彼女の旦那さんが入れ替わり顔を出してくれたのに、わたしは呆然として言葉もなく、ただネコババの指示通りに、線香を絶やさず遺体のそばに付き添つていただけだつた。時々意識が朦朧として、叔母の生死がわからなくなり、顔の白布をとりあげては、周りをはつとさせた。

翌日は、朝早くから来てくれた葬儀屋と、検屍官の来るのをひたすら待った。親切な葬儀屋で、——あるいはただ営業の都合上、時間を早く知りたかつたのかも知れない——朝の七時頃から、検屍官は何時に来るかと看護婦にききまわつてくれたが、要領を得なくて結局は九時まで待ち、検屍官が来たときにはもう九時半を過ぎていた。検屍があつというまにすむと、それからの葬儀屋の活躍はめざましくて、人間の一生がこんなに手早くけりをつけられるものなの

か、とわたしは感心するばかりだった。

病院から家へ帰ったとき、たった一晚のことだったのに、わたしは違う時代から現在に連れ戻されたような感じを受けた。これがわたしの家、長い間留守にした家、と不思議なものでも見るように思い、もうじき五歳になろうとする息子が抱きついてきたのに、いとしいとも、かわいそうとも思わなかった。息子のほうは、わたしと一晚離れていたものだから、わたしにすがりついたまま離れようとしなかった。わたしは息子の柔らかな背を抱きしめながら、二十五年前の春、息子よりもまだ幼かったわたしを、空港に出迎えてくれたという若い叔母のことを考えていた。

あのときのまだ二十だった叔母のことは、ことあるごとに祖母や叔母から聞かされて、本当は後で合成された記憶かもしれないのだが、あまり繰り返し聞かされたものだから、今ではわたしの三歳のときの記憶のように思っている。三歳の日本語も話せないわたしを出迎えたときの、叔母の困惑した表情を、わたしはずっと心に抱いたまま生きてきたような気さえるのだ。白い毛糸のワンピースを着て、スチュワードスのおねえさんに手をひかれ、乗客の一番後からタラップを降りたというわたし。チョコレートやキャンディの入った籐のバスケットを提げて、短いワンピースの下からお揃いの毛糸のパンツをのぞかせたわたしは、まるで人形のようにだった、と叔母はいつていた。

母から、向こうには叔母さんが待ってるからね、といわれていたが、わたしはもちろん叔母

の顔なんか知らなかった。

「ほら、あれがたぶんあなたの叔母さんよ」

とスチュワードスが身をかがめて、わたしに囁いた。彼女は、わたしの当座の着替えの入ったバッグを持ってくれていた。彼女の指さした若い女は、わたしたちが近づくと表情をゆるめ、
「恵里子？」

とスチュワードスにも、わたしにもなくいった。わたしは母から、『叔母さん』とか『お祖母さん』とかいう単語は教えられていたが、それと実体とは結びつかず、母によく似たその人を、スチュワードスの手を握ったまま、ぼんやりと見上げた。

「叔母さんよ。よく来たわねって」

スチュワードスにいわれて、わたしは呟くように、「アーンティ」といった。

「この子、日本語は話せないみたいね」

「そのうち話すんじゃないですか」

当惑したような叔母に、スチュワードスはもつと当惑した顔でそういうと、

「じゃあ、今度は叔母さんで行くのよ。気をつけてね、バイバイ」

とわたしに英語でいい、これ以上の面倒はみきれない、とでもいうように、叔母にバッグを渡して、そそくさと離れていった。

スチュワードスに代わって手をとってくれた叔母を、わたしは今度はおすおすで見上げた。叔母は笑ってなにかいったが、わたしは意味がわからなかったから、黙っていた。叔母は困っ

たように首を傾げた。わたしは喉が渴いていたので、そういつてみたが、叔母は顔を曇らせただけで、こたえなかった。わたしは本能的に、この人に気に入ってもらふ必要がある、と悟ったので、言葉を変えていろいろいつてみたが、叔母はますます黙り込んだだけだった。

構内のレストランの前に来たとき、ショーウィンドーの見本が珍しかったわたしは、バスケットを提げた手でそれをさし、喉が渴いて、おなかもちよい、とわめいてみた。叔母は立ち止まって、わたしの顔をみつめ、一人でうなずいてそこへ入っていった。

「どうしようかしら」

席を決めると、叔母は疲れたような顔をわたしに向けて、そう呟いた。わたしは、ウェイトレスの持ってきた水をすぐに飲み干して、辺りを見回し、隣のテーブルでチキンライスを食べている人の皿を指差して、あれを食べたい、といった。

「え？ チキンライスが食べたいの？」

チキンという音を捕らえたわたしは、うなずいた。わたしの知っている言葉が初めて出た嬉しさで、なにが来てもいいような気持ちだった。母によく似た若い叔母は、母よりもまめまめしく、わたしが食事をする世話をやいてくれた。

大森新地の祖母の家にいったとき、そこでわたしは生後の一年近くを過ごしたのだが、薄暗くて、なんだか怖くて、なかなか中へ入れなかった。やっと中へ入って、祖母と対面したとき、わたしは、早くロスアンジェルスへ帰りたい、と叫んでしまった。祖母と叔母は黙って顔を見合わせた。二人とも、言葉の通じないわたしをどう扱ったらいいのかもてあましているようで、

わたしがなにかいうたび、困ったように顔を見合わせた。

母は、「迎えに行くまで、お祖母さんの家にいるのよ」といって、わたしを送り出した。わたしはすぐに母が迎えに来るものと思い込んでいたから、「ママはまだ来ないの」と何度もきいた。

「もう帰りたいの。ママのところに帰るわ」

二人がいつまでも黙っているの、わたしは泣きじゃくり始め、帰る、帰ると繰り返した。

「しょうがないわねえ」

「こんな子送ってくるほうが悪いのよ」

二人は当惑して、わたしの母、つまり祖母の娘、叔母の姉をこきおろし始め、わたしは二人の話すまったく通じない言葉を、魔女の呪文のように聞きながら、時々泣くのを止めては聞き耳を立てていた。

祖母はわたしの気をひこうと、お菓子を出してきた。その初めて見る海苔を巻いた煎餅は、後々までわたしの苦手なおやつになった。夜になってもわたしたちは伝達の方法を見出せず、ついにわたしはおしっこを漏らしてしまった。粗相をしたことで反対に逆上して癇癇を起こしてしまったわたしに、若い叔母もヒステリーを起こし、わたしの口にその大きな煎餅を半分に割ってつつこんでくれた。息の詰まったわたしは目をむいて、祖母に煎餅をとってもらったのだが、海苔が上顎にくっついて、恐怖のあまり引き付けを起こしかけたほどだった。

その頃すでに会社に勤めていた叔母は、わたしが来るというので、二、三日休暇をとって

たのだが、翌日は早くから出掛けていった。やがて叔母はちよつと年配の男と一緒に戻つてきて、

「こちらは英語がお上手だから。いつも英語の手紙書いてらっしゃるし、なにかとお世話にもなってるのよ」

と祖母にいった。

「すみませんねえ。内輪のことですのに、会社の方までご迷惑をおかけして」

「いや、いや、お役に立てるかどうか……」

祖母は丁寧に頭を下げ、何度も私の言葉を繰り返した。男もそのたび祖母にお辞儀をし、それからわたしのほうへ向いて、おもむろになにかいった。わたしは、それが英語だとは思わなかったから、知らん顔をしていた。その男はもう一度なにかいったが、わたしは、叔母たちの話を聞いているときと同じくらい無表情に、押し黙っていた。すると叔母がわたしの腕をひっぱり、怖い顔をしてなにかいった。わたしはその男の人に悪いことをしたのかと思って、救いを求めるように祖母の顔を見上げた。

「怒ったって、子供なのだから……」

と男は叔母にいうと、またわたしに向かってなにかいった。男の繰り返す音を聞いているうちに、その緊張のない発音が、わたしにもだんだんと意味を持ってきた。急に嬉しくなったわたしは、早口で、うちへ帰るから飛行機に乗せて、とまくしたてた。

「もう帰るからね、ママに空港にお迎えに来てほしいの。わたし、もう帰るの。おうちに帰り